編さんを終えて

続巻発刊の経緯　平成二年（一九九〇年）は、滝川市開基一〇〇年という大きな節目の年にあたる。市では、滝川二世紀を迎えるにふさわしい記念事業を市民総参加のもとに計画、実施するために昭和六十年（一九八五年）七月一日、市民各層代表一〇〇人からなる滝川市開基一〇〇年記念事業企画推進会議（通称一〇〇人委員会）を組織し、以来全市的な規模で着々と事業を推進してきた。

この記念事業に寄せる市民の熱意は高く、市内外からの浄財は当初想定した額の約二倍、およそ二億二千万円に達し、後世に遺る各種記念事業は順調に進捗し、平成二年七月一日の記念式等も滞りなく感激と大盛会のうちに終了した。これら一連の記念事業の内容については本巻第十三編「付・二」に特集している。

この続巻の発刊も一〇〇年記念事業の一環として位置づけられたもので、昭和六十二年七月一日、市は開基一〇〇年記念事業実施本部事務局を総合福祉センター内に設置し、事務局長には前学校教育部長の藤原廣光（市史上・下巻執筆者）を発令、市史編集担当者として前滝川第一小学校長の藤井直衛を嘱託として採用し、ここに市史続巻編集の作業が開始される運びとなったのである。

編集にとりかかる前に吉岡市長から「現在ある滝川市史上・下巻は昭和五十六年に発刊されたばかりなので、今回全面改訂するのは時期尚早と思う。従って今度の内容は開基一〇〇年記念として、前回発行以降、記念の年までの史実を追加集録すればよいのではなかろうか。」という考え方が示され、この基本的な意向に添って仕事が進められることになった。

編集組織として、事業実施本部に「市史担当班」を設置し、資料や写真収集等の業務を担当し、内容の批正、原稿校正、編集等については、岡田秀夫助役を委員長とする「市史編集会議」を設けて業務を推進することとし、編集要項を次のように定めた。

一、名称は「滝川市史続巻」とし、その内容は昭和五十四年度から平成二年十二月までの史実を登載する。

二、続巻ということで、編さん方針は現市史上・下巻に準ずるが、補遺版としての性格もあわせて、現市史の記述中脱落または誤りのある内容については補足・修正をする。

三、編・章・節の名称は原則としてそのまま活かし、今回記述していない編・章の名称も本巻の目次に含めて上・下巻との関連を示すこととする。また、必要の場合は章・節を新設して記述する。

四、年表は、従来の年表を加除、修正して、平成二年十二月末までの事項を全部掲載する。

五、開基一〇〇年記念事業関係分を特集して、平成三年三月末を目途として発刊する。

六、写真は上・下巻との重複を避ける。
七、その他、記載上のことについては上・下巻に準ずる。

編集業務の推進　以上の編集要項により執筆作業に入ったのであるが、執筆上特に苦労したのは上・下巻との関連性であった。

それは、本巻に昭和五十四年度以降のことだけ記述したのでは以前との関連が十分理解されないこともあるし、反面、前のことを詳述すれば続巻の性格がうすれるし、そのうえ紙面の制約等も勘案しなければならず、これらのかねあいを計ることに腐心したのである。

結局、上・下巻を持たない人のためにも、上・下巻との関連性がある程度理解してもらえるように「つなぎ」の文を入れるということに落着いた。本巻のような形式の市町村史は全道的にも見当らず（豊頃町史追補版に一例あるが内容的には異なる）全く新しい試みなので、出来上がりに一抹の不安を覚えながら作業を進めた。

当初は、藤井編集員一人で執筆していたが、平成元年七月一日から椿谷年夫編集員（元、市立西小学校教頭を勤め、平成元年三月末に砂川中学校長を退職）が配置されて二人体制となり、以来急速に執筆、編集業務は進捗した。

この間において、藤原事務局長が平成元年一月末に退職し、三月までは、梅津進総務部長が兼任した。同年二月から岸照夫主査が事務局入り、同じく四月一日から屋敷悟事務局長が就任、平成二年一月には竹谷和徳主事も事務局員となった。また、昭和六十三年四月から清水昌子、平成元年七月には橋場由里子の臨時職員も配置され、一〇〇年事務局体制は強化されている。これらの事務局員は、記念大事業推進のために連日激務に追われていた中にあって、この市史編集業務についても力を注ぎ、取材・資料収集等に便宜を計っていただいたことは、まことに心強い限りであった。

また、多忙な本務のかたわら資料収集に献身的に活躍いただいた川井彰三、池田幾夫の両氏、写真撮影の市教委事務局、市立図書館の担当班の諸氏、さらに最終的に写真収集の総括をしていただいた狩野広報広聴係長など多くの方々のご尽力に心から感謝申しあげるところである。

一方、編集や原稿の批正、校正などについては、編集会議の委員諸氏から適切なご指導、ご助言をいただき、特に面倒な年表の修正については郷土史に造詣の深い元収入役の松重三郎氏に労を煩わすなど数多くの方々の温いご尽力に深く敬意を表するとともに、市内各機関、団体、個人の各位から貴重な資料を快くご提供賜わったことなど発刊に際して重ねて厚くお礼申しあげる次第である。

執筆分担　藤井編集員は第二編から第七編全部（第一編と、第三編は今回記述せず）と、第八編の農業、第十一編の治水、第十二編全部と、第十三編のうち、文化財と史跡、付・一「昭和から平成へ」、巻末の年表を担当した。

椿谷編集員は、第八編（農業を除く）、第九編、第十編、第十一編（治水を除く）、第十三編（文化財と史跡を除く）と、付・二の「二世紀に飛躍する滝川」（開基一〇〇年記念事業）を執筆した。

滝川の十年　世界の大勢は東西間の冷戦から対話、協調の平和路線を辿ってはいるが、現在、中東湾岸に危険な問題を抱えており、余断を許さない

情勢下にある。

日本国内は好況下にあり経済大国として世界に貢献の度合を高めているが、国鉄・タバコ・電信電話事業が民営化されるという大きな変革があった。また、昭和六十四年一月七日には昭和天皇が崩御、皇太子明仁親王が践祚され、翌一月八日から元号が平成に改元されるという厳粛な歴史的転換の場面も迎えている。

わが街、滝川市十年間を振り返ってみると、昭和四十六年に滝川市と江部乙町が合併して新滝川市として発足以来、吉岡市長が五期十九年余にわたって市政の舵取りを果たし、市勢はゆるぎなく、めざましい発展の道を歩んでいる。

産業経済面では流通団地等の造成による各種企業が進出し、駅前再開発を中核とする商工業の振興、農業開発公社設立を軸とした農業構造の改善と開発、丸加高原の観光リゾート事業などによる街の活性化が著しい。教育文化では、昭和五十七年の國學院女子短期大学開学をはじめとして、市立学校の不燃化達成、児童館、公民館、美術自然史館、川の科学館、こども科学館などの新設が相次ぎ、航空科学館とともにスカイスポーツとしての基地づくり、一〇〇年記念塔を擁する北電公園や水上公園など多くの公園が整備されてきた。

生活環境の向上では、近代的なごみ処理施設の新設、上・下水道施設の拡充、保健センター新設、流雪溝の一部完成など都市機能が飛躍的に整備されている。福祉の充実では、保育所の整備、身障者福祉センターや授産施設の建設、老人福祉施設の増強整備が図られ、最近ではデイサービスセンター、三世代交流センターなど幅広い福祉面の充実があり、これらを背景として平成元年四月一日には「健康都市宣言」を行った。

また、広域行政面でも消防、衛生、上・下水道などで関係自治体の中核として実績をあげ、平成元年度には「ふるさと市町村圏」の指定を受けており、道央自動車道の旭川までの供用開始の実現により、道央経済圏の要衝として一層の発展が期待されている。

なお、栃木市と名護市との友好親善都市盟約締結をはじめ、アメリカ・スプリングフィールド市やスウェーデン・キルナ市との国際間の友好親善も深められ、二十一世紀に飛翔する基盤も整ってきており、情報化、国際化を目指す近代都市として変貌しつつある。

こうした滝川二世紀への街づくりの基盤は、この十年間においてほぼ整備され、その締めくくりとして開基一〇〇年記念事業が見事に開花したとも言えるのではなかろうか。

まさに、滝川一世紀の末尾を飾るこの十年間の変容の実態を、今回の続巻に正しく記述し得たかどうか、充実した内容の上・下巻と比較してみて、いささか心もとない。続巻の呼称が示すとおり、いつの日か改めて上・下巻も含めた新しい滝川市史が刊行されることであろうが、本巻の不備や誤りなどについて補完していただくことを切望して編集後記とする。

平成二年十二月

（藤井編集員記）

滝川市史編集会議委員

委員長　岡田　秀夫（助役）
副委員長　工藤　文夫（収入役）
参与　荒島　保（助役）
委員　荒木　栄　梅津　進　三上　初夫　木村　正巳　高田　常弘　後藤　登　吉村　貞秋　渋田　伸一
片山　邦哉　白井　正二　磯島　彦司　川井　彰三　石黒　和彦　白井　重有　峯村　憲一　青木　良蔵
松重　三郎

滝川市史編集担当班
西井　勝明　池田　幾夫　広瀬　敏昭　外山　旭　田中　良吉

開基一〇〇年記念事業実施本部事務局
事務局長　屋敷　悟　主査　岸　照夫　主事　竹谷　和徳
市史編集員　藤井　直衛　同上　椿谷　年夫
臨時職員　高橋　芳江　同上　清水　昌子　同上　橋場由里子

滝川市史　続巻

平成三年三月三十一日発行

編集者　滝川市史編さん委員会

発行者　滝川市長　吉岡清栄

印刷　株式会社　ぎょうせい

本社営業所　東京都新宿区西五軒町四―二

北海道支社　札幌市中央区北二条西一〇丁目一―三

電話〇一一）二四一―一九七一

〒〇六〇